

2.24 地方・小出版流通センターの誕生

■ 地方・小出版流通センターが生まれたとき

1975年(昭和50年)秋に、東京・東村山図書館で「地方出版物展示会」が開催された。当時、東村山図書館の館長は鈴木喜久一氏であった。この展示会の本の調達は大手K書店であった。この頃はまだコンピュータもなく、もちろんPOSなど無い時代であった。

鈴木館長は目利きであったので、K書店の納品状況に首をかしげたのである。それは注文した本が思うように入荷せず、これと引き換えるように書店担当者から数多くの短冊を渡された。その短冊には取次不扱という判子が押されていた。つまり書店→取次→出版社の注文流通ルート上で、出版社と取次は取引が無かったのである。取次の取扱い出版社名簿に名前がなければ、取次は不扱の印を押して書店に返送するのであった。

鈴木館長は発注する前に、現物を見ていたのである。本が発行されているのに、読者の手に届かない出版業界のこの矛盾を新聞紙上に発表した。そこに着目したのが、川上賢一であった。当時、彼は25歳の若さであった。彼は地方にも立派な出版社があり、首都圏にも良書を発行している小出版社を知っていたのである。

川上は使命感に燃え、それまで勤めていた模索舎(ミニコミ書店)を退職して、全国の小出版社を駆け巡ったのである。この涙ぐましい努力はNHKの報道番組で30分に亘り放映された。青森の雪の中で版元を尋ねる姿、小出版社社長と出版を熱く語る川上の姿にどれだけ多くの読者が感動、感激したであろうか。

約一年の苦闘の末、出版、図書館関係者などの発起で『地方・小出版流通センター』が設立された。トーハン、日販など取次が今まで扱わなかった地方出版物、無名出版社の本を専門的に扱った。しかし経営が厳しいことは当初からわかっていた。なぜなら多品種、小部数扱いという取次の流通に反していたからである。

地方・小出版物流通センター(地方小)のスタートは目覚しかった。それは地方小の誕生の翌年1976年(昭和51年)、西武デパート(池袋)で行われた『地

方・小出版ブックフェア」が大盛況で、NHKをはじめ各局テレビが全国ネットで報道したので、地方小の存在が一挙に知られた。そして地方・小出版物の取扱い目録『あなたは、この本を知っていますか』を刊行し、読者と版元を結ぶ情報誌『アクセス』（定期刊）を創刊した。

地方出版物への関心の高まりを背景に、センターの活動は、読者をはじめ、出版界、図書館界で注目されたのである。センター開設以来併設されていた『展示センター』が1980年には神保町に移転し、改称し「書肆アクセス」となった。地方小の店売部門として、神保町の人気書店になった。

この間『ブックインとっとり』で「地方出版フェア」が行われたり、鳥取『本の国体』の会場からNHK教育番組が一時間に亘り放映されたことも印象深いことであった。この主催は今井書店であったが、バックアップしたのは地方・小出版流通センターであった。

1995年には、創立20周年記念事業が幕張メッセで行われた。祝辞に立った天野祐吉は『広告批評』が地方小扱いで、育てられたことを述べていた。記念品は1974～1994に発刊された3万3000点を集録した『あなたはこの本を知っていますか』厚さ5cmの総目録であった。

残念ながら神保町の書肆アクセスは、2007年に閉店した。出版業界全体の地盤沈下に地方出版物もその影響を受けている。反面、自費出版が急成長してきた。時代の変化は目まぐるしいが、地方・小出版流通センターのスローガンである“既成の流通ルートにのらない本の、流通システム”あるいは“一冊の本の自由な流通”の精神は今も厳然と生きている。

コラム

『あなたはこの本を知っていますか』

『あなたはこの本を知っていますか』は、地方・小出版流通センターの出版図書目録である。当該取次の扱い商品が全点掲載されている。取扱出版社474社、扱い点数2958点、地域別出版点数は次のとおり。

北海道121、東北121、関東353、東京918、中部・北陸310、関西526、中国112、四国73、九州323、沖縄96、海外5点 計2958点。